古文単語　敬語から主語を読む　①

高校／尊敬と謙譲から、動作をする人と敬意の向きを決める

名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿

日付 ＿＿＿＿＿＿＿＿

尊敬語は「動作をする人」へ、謙譲語は「動作を受ける人」へ敬意を向ける。
敬意を表す人（だれから）は、地の文なら「作者」、会話文（「」の中）なら「話し手」。
表に、――線①～⑧の敬語の種類（尊敬・謙譲）、動作をする人、敬意の向き（だれから→だれへ）を書く。
人は記号で答える。

人物の記号　ア 作者　イ 大納言　ウ 男ども（家来）　エ 神（楫取の御神）　オ 帝　カ 内侍（帝に仕える女官）

（A）場面　大伴の大納言は、龍の首の玉をとってくるよう、家来の男どもに命じた。

男ども仰の事を①承りて……大納言②のたまふ、「……」男ども③申すやう、「さらばいかがはせん。難きものなりとも、仰事に従ひてもとめにまからん。」（竹取物語）

（B）場面　龍を殺そうとして海に出た大納言は、嵐にあい、かじ取りにすすめられて神に祈る。

「よきことなり。」とて、「楫取の御神④きこしめせ。……」と、祝詞をはなちて、……（竹取物語）

（C）場面　帝の命令でかぐや姫の家へ行った内侍（ふさ子）が、宮中へ戻ってきた。

この内侍帰り⑤参りて、このよしを⑥奏す。帝⑦きこしめして、「多くの人を殺してける心ぞかし。」と⑧のたまひて、……（竹取物語）

問1

	種類	動作をする人	敬意（から）		敬意（へ）
① 承り				→	
② のたまふ				→	
③ 申す				→	
④ きこしめせ				→	
⑤ 参り				→	
⑥ 奏す				→	
⑦ きこしめし				→	
⑧ のたまひ				→	

いちごドリル プリント

つづきの無料プリント
「古文単語プリント」のプリント一覧がひらきます

古文単語　敬語から主語を読む　②

名前 _____

高校／敬語の種類から、だれの動作か・だれへの敬意かを決める　　日付 _____

尊敬語は「動作をする人」へ、謙譲語は「動作を受ける人」へ敬意を向ける。
敬意を表す人（だれから）は、地の文なら「作者」、会話文・手紙（「」の中）なら「話し手・書き手」。
表に、――線①～⑩の敬語の種類（尊敬・謙譲）、動作をする人、敬意の向き（だれから→だれへ）、意味を書く。
人は記号で答える。意味は、覚えている現代語の訳でよい。

人物の記号　ア 作者　イ 天人　ウ かぐや姫　エ 帝（おほやけ）

場面　月から迎えの天人が来た。天人はかぐや姫に不死の薬と天の羽衣をすすめ、かぐや姫は帝（おほやけ）に手紙を書く。最後の「」はその手紙の文。

ひとりの天人いふ、「壺なる御薬たてまつれ。きたなき所のもの①きこしめしたれば、御心地あしからんものぞ。」とて、持てよりたれば、いささかなめ②たまひて（中略）天人「おそし。」と心もとながり③たまふ。かぐや姫「もの知らぬことな④のたまひそ。」とて、いみじく静かにおほやけに御文⑤たてまつり⑥たまふ。（中略）「かくあまたの人を⑦たまひて留めさせ⑧たまへど、許さぬ迎へまうで来て、とり率て⑨まかりぬれば、口をしく悲しきこと、宮仕へ⑩つかうまつらずなりぬるも、……」（竹取物語）

問1

	種類	動作をする人	敬意（から）		敬意（へ）	意味
① きこしめし				→		
② たまひ				→		
③ たまふ				→		
④ のたまひ				→		
⑤ たてまつり				→		
⑥ たまふ				→		
⑦ たまひ				→		
⑧ たまへ				→		
⑨ まかり				→		
⑩ つかうまつら				→		

問2　⑦「たまひ」と⑧「たまへ」は同じ「たまふ」なのに、意味がちがう。そう決まる手がかりを、それぞれ書きなさい。

⑦

⑧

いちごドリル プリント

つづきの無料プリント
「古文単語プリント」のプリント一覧がひらきます

古文単語　敬語から主語を読む　③

名前 _____

高校／場面の説明なしで、敬語から人物と敬意の向きを決める　　日付 _____

尊敬語は「動作をする人」へ、謙譲語は「動作を受ける人」へ敬意を向ける。
敬意を表す人（だれから）は、地の文なら「作者」、会話文（「」の中）なら「話し手」。
表に、――線①～⑦の敬語の種類（尊敬・謙譲）、動作をする人、敬意の向き（だれから→だれへ）を書く。
人は記号で答える。
場面の説明はないので、本文の人物と敬語の種類から決める。

人物の記号　ア 作者　イ 親（翁と嫗）　ウ かぐや姫　エ 帝　オ 御使（帝の使い）

近く使はるる人々、竹取の翁に告げていはく、「……」といふを聞きて、かぐや姫にいふやう、「なでふ心ちすれば、かく物を思ひたるさまにて月を見①たまふぞ。うましき世に。」といふ。（中略）八月十五日ばかりの月にいで居て、かぐや姫いといたく泣き②たまふ。（中略）これを見て、親どもも「何事ぞ。」と問ひさわぐ。かぐや姫なくなくいふ、「さきざきも③申さんと思ひしかども、……」といひて、いみじく泣く。（中略）御使仰事とて翁にいはく、「いと心苦しく物思ふなるは、誠にか。」と④仰せたまふ。（中略）御使かへり⑤参りて、……を⑥きこしめして⑦のたまふ、「……」（竹取物語）

問1

	種類	動作をする人	敬意（から）		敬意（へ）
① たまふ				→	
② たまふ				→	
③ 申さ				→	
④ 仰せたまふ				→	
⑤ 参り				→	
⑥ きこしめし				→	
⑦ のたまふ				→	

問2　④「仰せたまふ」の動作をする人は、本文のどこにも書かれていない。そう決まる手がかりを書きなさい。

④

いちごドリル プリント

つづきの無料プリント
「古文単語プリント」のプリント一覧がひらきます

古文単語　敬語から主語を読む ④

高校／丁寧語・二方面の敬語もふくめて敬意の向きを決める

名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿

日付 ＿＿＿＿＿＿＿＿

尊敬語は「動作をする人」へ、謙譲語は「動作を受ける人」へ敬意を向ける。
丁寧語は、話し手から聞き手への敬意。動作をする人の欄には「ー」と書く。
この枚の敬語はすべて会話文なので、敬意は話し手から向かう。人は記号で答える。
表に、――線①～⑧の敬語の種類（尊敬・謙譲・丁寧）、動作をする人、敬意の向き（だれから→だれへ）を書く。

人物の記号　ア 翁　イ かぐや姫　ウ 五人の求婚者　エ 聖海上人（高僧）　オ 神官

（A）場面　翁が、かぐや姫に、五人の求婚者のだれかと結婚するようすすめている。会話は翁→かぐや姫→翁の順に進む。

「翁年七十に余りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、男は女にあふことをす。女は男に合ふことをす。その後なん門も広くなり①侍る。いかでかさる事なくてはおはしまさん。」かぐや姫のいはく、「なでふさることかし②はべらん。」といへば、「変化の人といふとも、女の身もち③たまへり。翁のあらん限は、……一人々々にあひ④奉り⑤たまひね。」（竹取物語）

（B）場面　聖海上人は、神社の獅子（こまいぬ）の向きを珍しがり、神官にわけをたずねる。

おとなしく物知りぬべき顔したる神官をよびて、「この御社の獅子の立てられやう、定めてならひあることに⑥はべらむ。ちと⑦承らばや。」といはれければ、「そのことに⑧候。……」とて、（徒然草）

問1

	種類	動作をする人	敬意（から）		敬意（へ）
① 侍る				→	
② はべら				→	
③ たまへ				→	
④ 奉り				→	
⑤ たまひ				→	
⑥ はべら				→	
⑦ 承ら				→	
⑧ 候				→	

問2　④「奉り」と⑤「たまひ」は、「あふ」という一つの動作に付いた2つの敬語（二方面への敬語）。それぞれだれへの敬意か、手がかりといっしょに書きなさい。

④

⑤

いちごドリル プリント

つづきの無料プリント
「古文単語プリント」のプリント一覧がひらきます

古文単語　敬語から主語を読む　⑤

高校／敬語から省略された主語を補って訳す

名前 _____

日付 _____

敬語の種類から、書かれていない主語を補う。尊敬語は動作をする人を高める。
謙譲語は動作を受ける人を高めるので、動作をする人は受ける人より下の人になる。
表に、――線①～⑤の動作をする人（主語）を記号で書き、――線の語を訳語表の言葉で訳して書く。
問2は、主語を補って文を現代語に訳す。

訳語表　めす＝お呼びになる／お取り寄せになる／召し上がる　まゐる＝参上する／差し上げる／召し上がる
　　おほす＝おっしゃる／お命じになる　きこしめす＝お聞きになる／召し上がる／お治めになる　のたまふ＝おっしゃる

（A）場面　（国の人が語る昔話）火たき番の衛士の男が独り言を言う。それを聞いた帝の姫君が、御簾の内から男に声をかける。
人物の記号　ア　姫君（帝の娘）　イ　衛士の男

御簾を押しあげて、「あの男こち寄れ」と①召しければ、かしこまりて、勾欄のつらに②参りたりければ、「言ひつる事いま一返、我にいひて聞かせよ」と③仰せければ、……（更級日記）

（B）場面　桐壺の更衣を亡くした帝は、悲しみのあまり、食事も満足にとれなくなった。
人物の記号　ウ　帝

ものなども④聞こし召さず、朝餉のけしきばかり触れさせたまひて、……（源氏物語）

（C）場面　中納言は家来の男どもに「燕が巣を作ったら知らせよ」と言いつけた。男どもがわけをたずねる。
人物の記号　エ　中納言　　オ　男ども

「何の料にかあらん。」と申す。答へて⑤のたまふやう、「燕のもたる子安貝とらん料なり。」（竹取物語）

問1

	主語（記号）	訳語（訳語表から）
① 召し		
② 参り		
③ 仰せ		
④ 聞こし召さ		
⑤ のたまふ		

問2　（A）の文を、主語をおぎなって現代語に訳しなさい。――線の敬語は、訳語表の言葉で訳すこと。

A

いちごドリル プリント

つづきの無料プリント
「古文単語プリント」のプリント一覧がひらきます

古文単語　敬語から主語を読む　①【こたえ】

名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿

高校／尊敬と謙譲から、動作をする人と敬意の向きを決める

日付 ＿＿＿＿＿＿＿＿

赤い字がこたえです。敬意の向きは「だれから→だれへ」です。
――線の語はどれも、補助動詞ではなく本動詞（ほかの動詞の下に付かない）の敬語です。

人物の記号　ア　作者　　イ　大納言　　ウ　男ども（家来）　　エ　神（楫取の御神）　　オ　帝　　カ　内侍（帝に仕える女官）

（A）場面　大伴の大納言は、龍の首の玉をとってくるよう、家来の男どもに命じた。

男ども仰の事を①承りて……大納言②のたまふ、「……」男ども③申すやう、「さらばいかがはせん。難きものなりとも、仰事に従ひてもとめにまからん。」（竹取物語）

（B）場面　龍を殺そうとして海に出た大納言は、嵐にあい、かじ取りにすすめられて神に祈る。

「よきことなり。」とて、「楫取の御神④きこしめせ。……」と、祝詞をはなちて、……（竹取物語）

（C）場面　帝の命令でかぐや姫の家へ行った内侍（ふさ子）が、宮中へ戻ってきた。

この内侍帰り⑤参りて、このよしを⑥奏す。帝⑦きこしめして、「多くの人を殺してける心ぞかし。」と⑧のたまひて、……（竹取物語）

問1

	種類	動作をする人	敬意（から）		敬意（へ）
① 承り	謙譲	ウ	ア	→	イ
② のたまふ	尊敬	イ	ア	→	イ
③ 申す	謙譲	ウ	ア	→	イ
④ きこしめせ	尊敬	エ	イ	→	エ
⑤ 参り	謙譲	カ	ア	→	オ
⑥ 奏す	謙譲	カ	ア	→	オ
⑦ きこしめし	尊敬	オ	ア	→	オ
⑧ のたまひ	尊敬	オ	ア	→	オ

・尊敬語（②④⑦⑧）は動作をする人へ、謙譲語（①③⑤⑥）は動作を受ける人へ敬意が向かう。
・会話文の敬語（④）は話し手から、地の文の敬語（①②③⑤⑥⑦⑧）は作者から。
・①承る・③申すの受け手は、仰せや言葉を向ける相手の大納言。④「きこしめせ」は聞く神（動作をする人）への敬意で、話し手は大納言。⑤参る・⑥奏すの受け手は帝（「奏す」は天皇・上皇に申し上げる語）。

古文単語　敬語から主語を読む　②【こたえ】

名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿

高校／敬語の種類から、だれの動作か・だれへの敬意かを決める　　日付 ＿＿＿＿＿＿＿＿

赤い字がこたえです。敬意の向きは「だれから→だれへ」。意味は代表的な訳語で、ほかの自然な訳も正解です。
主語が書かれていないところは、敬語の種類と、会話文か地の文かを手がかりに決めます。

人物の記号　ア　作者　　イ　天人　　ウ　かぐや姫　　エ　帝（おほやけ）

場面　月から迎えの天人が来た。天人はかぐや姫に不死の薬と天の羽衣をすすめ、かぐや姫は帝（おほやけ）に手紙を書く。最後の「」はその手紙の文。

ひとりの天人いふ、「壺なる御薬たてまつれ。きたなき所のもの①きこしめしたれば、御心地あしからんものぞ。」とて、持てよりたれば、いささかなめ②たまひて（中略）天人「おそし。」と心もとながり③たまふ。かぐや姫「もの知らぬことな④のたまひそ。」とて、いみじく静かにおほやけに御文⑤たてまつり⑥たまふ。（中略）「かくあまたの人を⑦たまひて留めさせ⑧たまへど、許さぬ迎へまうで来て、とり率て⑨まかりぬれば、口をしく悲しきこと、宮仕へ⑩つかうまつらずなりぬるも、……」（竹取物語）

問1

	種類	動作をする人	敬意（から）		敬意（へ）	意味
① きこしめし	尊敬	ウ	イ	→	ウ	召し上がる
② たまひ	尊敬	ウ	ア	→	ウ	～なさる
③ たまふ	尊敬	イ	ア	→	イ	～なさる
④ のたまひ	尊敬	イ	ウ	→	イ	おっしゃる
⑤ たてまつり	謙譲	ウ	ア	→	エ	差し上げる
⑥ たまふ	尊敬	ウ	ア	→	ウ	～なさる
⑦ たまひ	尊敬	エ	ウ	→	エ	お与えになる
⑧ たまへ	尊敬	エ	ウ	→	エ	～なさる
⑨ まかり	謙譲	ウ	ウ	→	エ	退出する
⑩ つかうまつら	謙譲	ウ	ウ	→	エ	お仕え申し上げる

問2　⑦「たまひ」と⑧「たまへ」は同じ「たまふ」なのに、意味がちがう。そう決まる手がかりを、それぞれ書きなさい。

⑦　「人を」とあり、動詞の下に付かず単独で使われている→本動詞「お与えになる」

⑧　「留めさせ」と、動詞の下に付いている→補助動詞「～なさる」

・尊敬語（①②③④⑥⑦⑧）は動作をする人へ、謙譲語（⑤⑨⑩）は動作を受ける人へ敬意が向かう。
・会話文・手紙の敬語（①④⑦⑧⑨⑩）は話し手・書き手から、地の文の敬語（②③⑤⑥）は作者から。
・動詞の下に付く「たまふ」（②③⑥⑧）は補助動詞で、意味は「～なさる」（「お～になる」も可）。
・④「な～そ」は天人への禁止。⑦～⑩は手紙の文なので書き手のかぐや姫から。⑦人を与えるのは帝、⑧「させたまへ」は帝への敬意、⑨⑩は帝のもとを去る・帝に仕えるかぐや姫の動作。⑨は「迎へ（天人）」を主語とする読みもあるので、イも正解（敬意の向きは同じ）。

古文単語　敬語から主語を読む　③【こたえ】

高校／場面の説明なしで、敬語から人物と敬意の向きを決める

名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿

日付 ＿＿＿＿＿＿＿＿

赤い字がこたえです。敬意の向きは「だれから→だれへ」です。
主語の書かれていない文は、敬語の種類と、地の文か会話文かを手がかりに決めます。

人物の記号　ア 作者　イ 親（翁と嫗）　ウ かぐや姫　エ 帝　オ 御使（帝の使い）

近く使はるる人々、竹取の翁に告げていはく、「……」といふを聞きて、かぐや姫にいふやう、「なでふ心ちすれば、かく物を思ひたるさまにて月を見①たまふぞ。うましき世に。」といふ。（中略）八月十五日ばかりの月にいで居て、かぐや姫いといたく泣き②たまふ。（中略）これを見て、親どもも「何事ぞ。」と問ひさわぐ。かぐや姫なくなくいふ、「さきざきも③申さんと思ひしかども、……」といひて、いみじく泣く。（中略）御使仰事とて翁にいはく、「いと心苦しく物思ふなるは、誠にか。」と④仰せたまふ。（中略）御使かへり⑤参りて、……を⑥きこしめして⑦のたまふ、「……」（竹取物語）

問1

	種類	動作をする人	敬意（から）		敬意（へ）
① たまふ	尊敬	ウ	イ	→	ウ
② たまふ	尊敬	ウ	ア	→	ウ
③ 申さ	謙譲	ウ	ウ	→	イ
④ 仰せたまふ	尊敬	エ	ア	→	エ
⑤ 参り	謙譲	オ	ア	→	エ
⑥ きこしめし	尊敬	エ	ア	→	エ
⑦ のたまふ	尊敬	エ	ア	→	エ

問2　④「仰せたまふ」の動作をする人は、本文のどこにも書かれていない。そう決まる手がかりを書きなさい。

④ 「仰事とて」と帝の言葉を伝える文で、尊敬語「仰せたまふ」が付く→動作をする人は帝（エ）。御使は帝の使い

・尊敬語（①②④⑥⑦）は動作をする人へ、謙譲語（③⑤）は動作を受ける人へ敬意が向かう。
・会話文の敬語（①③）は話し手から、地の文の敬語（②④⑤⑥⑦）は作者から。
・動詞の下に付く「たまふ」（①②）は補助動詞（尊敬）。
・③「申さ」は謙譲語で、受け手は話しかけている親。④「仰せたまふ」は最高敬語（二重の尊敬）。御使が帝の言葉を伝える文で、「いはく」の主語は御使だが、敬語（尊敬）があるので、動作をする人は帝。

古文単語　敬語から主語を読む　④【こたえ】

名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿

高校／丁寧語・二方面の敬語もふくめて敬意の向きを決める　　日付 ＿＿＿＿＿＿＿＿

赤い字がこたえです。丁寧語の動作をする人の欄は「ー」です。
④と⑤は一つの動作に付いた2つの敬語（二方面への敬語）です。敬意の向かう先がちがいます。

人物の記号　ア　翁　　イ　かぐや姫　　ウ　五人の求婚者　　エ　聖海上人（高僧）　　オ　神官

（A）場面　翁が、かぐや姫に、五人の求婚者のだれかと結婚するようすすめている。会話は翁→かぐや姫→翁の順に進む。

「翁年七十に余りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、男は女にあふことをす。女は男に合ふことをす。その後なん門も広くなり①侍る。いかでかさる事なくてはおはしまさん。」かぐや姫のいはく、「なでふさることかし②はべらん。」といへば、「変化の人といふとも、女の身もち③たまへり。翁のあらん限は、……一人々々にあひ④奉り⑤たまひね。」（竹取物語）

（B）場面　聖海上人は、神社の獅子（こまいぬ）の向きを珍しがり、神官にわけをたずねる。

おとなしく物知りぬべき顔したる神官をよびて、「この御社の獅子の立てられやう、定めてならひあることに⑥はべらむ。ちと⑦承らばや。」といはれければ、「そのことに⑧候。……」とて、（徒然草）

問1

	種類	動作をする人	敬意（から）		敬意（へ）
① 侍る	丁寧	ー	ア	→	イ
② はべら	丁寧	ー	イ	→	ア
③ たまへ	尊敬	イ	ア	→	イ
④ 奉り	謙譲	イ	ア	→	ウ
⑤ たまひ	尊敬	イ	ア	→	イ
⑥ はべら	丁寧	ー	エ	→	オ
⑦ 承ら	謙譲	エ	エ	→	オ
⑧ 候	丁寧	ー	オ	→	エ

問2　④「奉り」と⑤「たまひ」は、「あふ」という一つの動作に付いた2つの敬語（二方面への敬語）。それぞれだれへの敬意か、手がかりといっしょに書きなさい。

④ 「一人々々に」と、動作を受ける相手が書かれている→謙譲語。受け手の五人の求婚者（ウ）への敬意

⑤ あふのは、すすめられているかぐや姫自身→尊敬語。動作をするかぐや姫（イ）への敬意

・尊敬語（③⑤）は動作をする人へ、謙譲語（④⑦）は動作を受ける人へ敬意が向かう。
・丁寧語（①②⑥⑧）は、動作をする人でも受ける人でもなく、聞き手に敬意が向かう。
・動詞の下に付く「たまふ」（③⑤）は補助動詞（尊敬）。
・侍り・候は「ございます」の意なら丁寧語（「お仕えする」の意なら謙譲語）。①②⑥⑧は「ございます」の意で丁寧語。

古文単語　敬語から主語を読む　⑤【こたえ】

名前 ＿＿＿＿＿＿＿＿

高校／敬語から省略された主語を補って訳す

日付 ＿＿＿＿＿＿＿＿

赤い字がこたえです。訳語の活用の形（「お呼びになった」など）はちがってもかまいません。
同じ敬語でも、本文によって主語が入れかわります（「ければ」の前後に注意）。

訳語表　めす＝お呼びになる／お取り寄せになる／召し上がる　まゐる＝参上する／差し上げる／召し上がる
おほす＝おっしゃる／お命じになる　きこしめす＝お聞きになる／召し上がる／お治めになる　のたまふ＝おっしゃる

（A）場面　（国の人が語る昔話）火たき番の衛士の男が独り言を言う。それを聞いた帝の姫君が、御簾の内から男に声をかける。
人物の記号　ア　姫君（帝の娘）　イ　衛士の男

御簾を押しあげて、「あの男こち寄れ」と①召しければ、かしこまりて、勾欄のつらに②参りたりければ、「言ひつる事いま一返、我にいひて聞かせよ」と③仰せければ、……（更級日記）

（B）場面　桐壺の更衣を亡くした帝は、悲しみのあまり、食事も満足にとれなくなった。
人物の記号　ウ　帝

ものなども④聞こし召さず、朝餉のけしきばかり触れさせたまひて、……（源氏物語）

（C）場面　中納言は家来の男どもに「燕が巣を作ったら知らせよ」と言いつけた。男どもがわけをたずねる。
人物の記号　エ　中納言　　オ　男ども

「何の料にかあらん。」と申す。答へて⑤のたまふやう、「燕のもたる子安貝とらん料なり。」（竹取物語）

問1

	主語（記号）	訳語（訳語表から）
① 召し	ア	お呼びになる
② 参り	イ	参上する
③ 仰せ	ア	おっしゃる
④ 聞こし召さ	ウ	召し上がる
⑤ のたまふ	エ	おっしゃる

問2　（A）の文を、主語をおぎなって現代語に訳しなさい。――線の敬語は、訳語表の言葉で訳すこと。

A　（姫君は）御簾を押しあげて、「あの男、こちらへ寄れ」とお呼びになったので、（男は）恐縮して、欄干のそばに参上したところ、（姫君は）「言った事をもう一度、私に言って聞かせよ」とおっしゃったので、

・①は姫君が男をお呼びになる。②は男が姫君のもとへ参上する（謙譲語の動作をする人は下の人）。③は姫君。④は帝。⑤は男どもの「申す」に答える中納言。
・こたえは一例です。③は「お命じになる」も正解。次のことができていれば、ほかの訳し方でも正解です。
☐ 主語（姫君・男・帝・中納言）を正しく補えている
☐ ――線の敬語を、訳語表の言葉で訳せている
☐ 問2で、「ければ」の前後の主語の入れかわり（姫君→男→姫君）を訳し分けている